



優秀賞 (中学校の部)



椋鳩十が描いた未来

「ふしぎな石と魚の島」 長野市立櫻ヶ岡中学校三年 岩佐 天花

私が読んだ「ふしぎな石と魚の島」という物語は主人公の村岡三五が姫島という島に住んでいる叔父のところへ訪ねる場面から始まります。そこで三五のいとこの春夫に出会い二人は島を探索していきます。二人が島の歴史を自分たちの手で探っていくところで小さな島の中で一つ一つの出来事や描写が細かく書かれています。私は読んでいて、場面の壮大さに迫力があり、三五と春夫と共に冒険しているような臨場感も持ち合わせていて、とても楽しく読むことができました。

え影響が及び尊い命を失っていることでもあります。戦争は「現在」を優先して起るもの。戦争をして人たちは「未来」のことを考えているのか。誰かが気付けているのか。周りから見ている人はそう思います。また、今の地球では「持続可能」と唱えられています。しかし今の自分が満足できれば良いと、水の無駄使い、電気の使い過ぎをしている人間はいます。姫島のように誰かが動かないと未来は悪化していくばかりです。

このように私たちもこの島の人びとを見習って自分の子孫が今の私たちのように快適に幸に楽しく過ごせるような未来が必要であると思います。「ふしぎな石と魚の島」が出版された時、椋鳩十さんは、今を生きる私たちやその先の未来を生きる人間に向かってそんなメッセージをこの広い物語の中に託していたのではないのでしょうか。自分の

「にせもの」の正彦。彼が、市瀬先生から渡された『ハイジ』という一冊から本の世界に目覚め、「赤松は夕やけ色の幹をしていた。そういう木の何百本も、すくすくと立ち並んでいる林はお祭りの市場のような、はなやかな感じがした」ととらえるくだりである。思えば「にせもの」英雄のこの章は名文のつるべ打ちだ。「活字の林から、金色の陽の光のようなものが、にじみ出てきたり、何ともいわれぬ、不思議な音色みたいなのが流れ出てくるように、うっとりとして、活字のつくりだすことばの中にとけこんでいくや、「同じ名前のアルプスの峰々が、ハイジのアルプスと同じように、まっ赤に夕やけて、遠く遠く続いているのだ」という情景描写、そして「感動というものは、人間を感動の色彩にそめ上げ、感動

の方向に心を引っばっていくものだ」に極まる。正彦が心を震わせた経験(つまり感動)が、やはり活字を通じて、時空を超えて僕に宿り、栄村の自然に「ハイジの夕やけ」を重ねさせたのだ。

正彦も、ちょうど市瀬先生と出会ったこの頃は、「にせもの」英雄を卒業し、講談本に熱中していた自分を卒業し、真の感動に身を委ねることの高適性がわかちかけてきた時期だ。その後の「セガテニ伝」に魅かれるのも、中学校で正木先生の薫陶を受けるのも、この時期の「ハイジの夕やけ」の感動がその根底にあつたればこそだ。

僕は、いつの日か栄村の常慶院で秋の夕やけを堪能したい。先ほど「感動は時空を超える」と書いた。視るだけではない。冬の訪れが混ざった北風の音を聞き、西に傾いた赤い陽に照らされたい。そして、わが身も地球の一欠片(ひとかけら)であることを体全体で味わいたい。正彦の故郷と栄村では、長野県の南と北の果て数百キロメートルも離れている。時代も違う。しかし感動は時空を超えることを教えてくれた。

正彦の「ハイジの夕やけ」の感動は、僕に多くのことを教えてくれた。

優秀賞 (一般の部)

感動は時空を超える

「にせもの」の英雄 長野市 山口 真一

今年の夏、僕は下水内郡栄村にある常慶院という古寺を訪れる機会があった。山の斜面の地形を利用した作りの境内で、一對の仁王像が門番のように構えている。山門をくぐって西の方角へ向かって急な石段を上がった。やつの思いで石段を上がると、そこかしこに視界が開ける。左手には鐘つき堂、右手から正面には大きな本堂、そして何よりその奥や周囲にかけては緑の山々が覆っている。時期が時期だったので、ここまで来ても「暑い」の気持ちしか湧かなかった。

が、しばらくそこで休憩しながら周囲を眺めていると、この地を「秋の夕暮れ時に散歩できたなら、さぞ気持ちいいだろうな」という思いに駆られた。「なぜこんなことを思ったのだろう」と、翌日になって自覚した。少し前に読んでいた「にせもの」英雄の、ある一節が印象に残り、それが自分の心の中で自然と増幅していたのだ。ある一節とは、言うまでもない、それまで「不細工な少年」と大人からは軽く見られ、偶然と誤解が重なった結果、悪ガキたちからは不思議と英雄視されていた

「にせもの」の正彦。彼が、市瀬先生から渡された『ハイジ』という一冊から本の世界に目覚め、「赤松は夕やけ色の幹をしていた。そういう木の何百本も、すくすくと立ち並んでいる林はお祭りの市場のような、はなやかな感じがした」ととらえるくだりである。思えば「にせもの」英雄のこの章は名文のつるべ打ちだ。「活字の林から、金色の陽の光のようなものが、にじみ出てきたり、何ともいわれぬ、不思議な音色みたいなのが流れ出てくるように、うっとりとして、活字のつくりだすことばの中にとけこんでいくや、「同じ名前のアルプスの峰々が、ハイジのアルプスと同じように、まっ赤に夕やけて、遠く遠く続いているのだ」という情景描写、そして「感動というものは、人間を感動の色彩にそめ上げ、感動

の方向に心を引っばっていくものだ」に極まる。正彦が心を震わせた経験(つまり感動)が、やはり活字を通じて、時空を超えて僕に宿り、栄村の自然に「ハイジの夕やけ」を重ねさせたのだ。

正彦も、ちょうど市瀬先生と出会ったこの頃は、「にせもの」英雄を卒業し、講談本に熱中していた自分を卒業し、真の感動に身を委ねることの高適性がわかちかけてきた時期だ。その後の「セガテニ伝」に魅かれるのも、中学校で正木先生の薫陶を受けるのも、この時期の「ハイジの夕やけ」の感動がその根底にあつたればこそだ。

僕は、いつの日か栄村の常慶院で秋の夕やけを堪能したい。先ほど「感動は時空を超える」と書いた。視るだけではない。冬の訪れが混ざった北風の音を聞き、西に傾いた赤い陽に照らされたい。そして、わが身も地球の一欠片(ひとかけら)であることを体全体で味わいたい。正彦の故郷と栄村では、長野県の南と北の果て数百キロメートルも離れている。時代も違う。しかし感動は時空を超えることを教えてくれた。

正彦の「ハイジの夕やけ」の感動は、僕に多くのことを教えてくれた。

たかぎ短歌会

如月歌会詠草

煙火打ちを楽しみて来し八十路なる夫はようやく退く決意する 木下 寿子

冬枯れの庭にのこれる「高砂百合」風に吹かれて種を撒き 元島 康子

息子等は亡夫の名一字を犬の名に「勝一郎」と呼びて餌をやる 小椋 りよ

生業を引退すれば所在なく言葉に出さねど心が揺らぐ 知久 美子

受験した女孫と一緒にドキドキと結果決まる日 内山 貴子

脳梗塞乗り越えし友以前より浚渌として二度生きている

大寒のつれて来たりし今朝の雪裸木の肌をふんわりつつむ 市瀬 准子

いつまでも友で居ようネと高卒時約した貴女今は特養 木林 睦枝

すり初めも七草がゆもお座なりに済ませながらも健康願う 田中 妙子

厳寒も家に籠らず散歩とて夫は野道を一人で歩む 和田 京子

御嶽山の行者の禊岩のぞき見てはるか昭和の長閑さ惚ぶ 内山 和子

兵隊さん戦車兵に憧れし幼日ありきレオパルト2 塩澤 静男

福澤 亀人

宇佐美さん 弓道全国大会出場



第四十二回全国高等学校弓道大会(十二月二十三日〜二十五日開催)に女子個人の部で出場された宇佐美瑠菜さん(飯田女子高二年・富田)の激励会が

十二月十九日に行われ、村及び村体育協会から激励金が授与されました。宇佐美さんは、十月二十二〜二十三日に行われた長野県大会女子個人の部で優勝し、熊本県本庄市で行われる全国大会に出場することになりました。結果は初戦にて四射中二中で惜しくも敗退しました。宇佐美さんは高校進学を機に弓道を始め、二年目に



して長野県で優勝し全国へ出場しました。大会は惜しくも敗退となりましたが、今後のご健闘をお祈りいたします。

編集後記

三月いろいろな別れがいたる所である。年度替わりの時期、別れ又は次の出会いの時でもある。

先日まで寒い寒いとストーブから離れられなかったが、最近では昼はぼかぼか。こつちがセンチになろうとおかまもなく、自然は正確で立ち止まる事もなく前へ進んでいく。

これから出会う多くの事に不安もあるけれど、又思いうかが始まるという事。一日一日大切に進んで行こうと思う春の日です。

【節分ちまきとアンケート 結果について】

●節分で投げる豆は何豆? → 煎り大豆 50% 落花生 50%

ご参加ありがとうございました(^O^)



春です サークル活動をしませんか?

公民館には、趣味や教養を高めるためのサークルが数多くあります。新しい学び・交友関係の開拓に向けて、サークル活動に参加してみませんか?

また、新規サークルを立ち上げるには、5人以上のメンバー(村内居住又は勤務者が半分以上が条件)が集まれば登録申請が可能です!

詳しくは公民館事務局(TEL:33-2002)までお問合せください。